

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

批判的談話分析から考察するアメリカの人種をめぐるディスコースの前提

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学 公開日: 2022-03-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 朴, 育美 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://kansai.gaidai.repo.nii.ac.jp/records/8071

批判的談話分析から考察するアメリカの 人種をめぐるディスコースの前提

外国語学部准教授 朴 育美

1. はじめに

私たちは書いたり話したりするとき、メッセージの受け手を念頭に内容を考える。なぜなら話されたものであれ書かれたものであれ、メッセージは、話し手と聞き手の相互理解を必要とするからだ。メッセージは、送り手と受け手の間で共有される歴史的、文化的、社会的な了解事項があって初めて、メッセージとして機能し成立する。

Fairclough (1995, 2001) は、私たちがあらゆる可能性の中から自由に紡ぎだしているように見えるナラティブが、実は支配的なディスコース (言説) の規制を受け、社会的に構築、生産、解釈されていることを指摘した。ディスコースの中で行われるやり取りという点において、ナラティブは書かれたものも話されたものも、すべて共有される文脈を前提とした社会的相互行為 (Schiffrin, 1994) であり、その社会の社会的・文化的規範の外に出ることはできない (Holmes, 2008)。

Fairclough のディスコースの概念は、エスノメソドロジーの提唱者の Garfinkel (1967) が焦点をあてた「期待や常識が共有された特定の言説空間」や Anderson (1991) のいう「創造の共同体」が共有する「言語、言説によって作り上げられた生活世界」に通じるだろう。ナラティブをナラティブとして成り立たせるのは、その社会のディスコースの枠組みであり、無意識のうちに共有されている前提だ。批判的談話分析は、「当たり前のこと」として見過ごされているディスコースの前提を顕在化させ、その社会に潜むバイアスを明らかにする。

この論考では、批判的談話分析のアプローチから、「人種」にまつわるアメリカ社会のディスコースの前提-バイアスを明らかにしたい。具体的には、1) 奴隷制度が容認されてきた時代、2) 奴隷制度廃止に向けての時代、3) 公民権法制定への時代、4) 黒人大統領誕生以降の歴代大統領や黒人リー

ダーらのナラティブを取り上げ、ディスコースの枠組みが「人種」をどのように規定し、「人種」について何が「当たり前」とされてきたのか、その変遷を顕在化させる。

例えば、建国以来長い間アメリカでは、極めて非人道的な奴隷制度を温存させながら、政治家たちが大衆に向かって「すべての人の自由と平等」を訴えていた。そのような演説が問題視されることなく、成り立っていたのはなぜか。それは当時のディスコースが黒人を「すべての人」の概念から排除し、同じ人間として扱わないことが「当たり前」とされていたからだ（黒人以外にも原住民、女性をはじめ様々なマイノリティが含まれていなかったが、ここでは黒人に焦点をあてる）。差別の狡猾さは、悪意を持ってなされるというよりは、むしろ社会の「当たり前」や「常識」に根差していることにあるだろう。

「人」として扱われない黒人は、アメリカの主流派のディスコースでは長い間不在の存在であり、無視され沈黙させられてきた。しかしだからといって、彼ら/彼女らがあらゆる場面で黙らされてきたわけではない。黒人の運動家たちが、自らの経験が共有されるサブディスコースで、たくさんの力強いメッセージを発信してきたことも事実である。サブディスコースで発信されたメッセージは、抑圧されてきた人々の自尊心や尊厳に訴えかけ、やがては主流派のディスコースにも一定の場所を勝ち取り、奴隷解放、公民権法の制定、黒人大統領誕生への原動力になっていった。

しかし、今なお主流派のディスコースは、様々な人種間の格差を「当たり前」のこととして見過ごしている部分も大きく、黒人のサブディスコースとの間にあるギャップはなかなか埋まらない。それは昨年来のBlack Lives Matterのムーブメントにも連なっているといえる。この論考では主流派のディスコースで「人種」がどのように前提されてきたのか、その変遷をたどりながら、今に至る「人種」の問題を批判的談話分析の視点から考察する。

2. 奴隷制度が容認された時代

まず第三代大統領トーマス・ジェファソン（Thomas Jefferson）を主著

者として執筆された独立宣言の文言と、ジェファソン大統領の就任演説の一部を取り上げてみる¹⁾。

すべての人間は平等に創造され、創造主によって、生命、自由、幸福の追求といった奪うことのできない権利を授けられた存在であることは、自明の真理である。－1776年7月4日独立宣言

宗教的であれ政治的であれ、いかなる地位や信条に拘わらず、すべての人々に平等で厳正なる正義を。どの国との同盟に巻き込まれることなくすべての国との平和、通商、そして誠実な友好関係を。－1801年3月4日就大統領就任説

イギリスがアメリカ植民地各州に対して新たに印紙税の導入を行うなど、統制圧力を強化した1760年代以降、イギリス本国からの圧力に対して、各州は強く反発、自由と自立を求めた抵抗運動は独立戦争に発展する。イギリスの不当支配に対する抵抗のための独立戦争と「すべての人間の平等と生命、自由、幸福の追求の権利」を謳う独立宣言は、自由と自立のためならば武器を持って戦うことも正当化されるという当時のディスコースを顕在化させる。ただし独立宣言は、アフリカから強制的に連れてこられ、絶対的に隷属的な立場で労役に従事させられている奴隷の権利についてはおろか、その存在自体についても述べていない。

就任演説では、すべて人々の平等で厳正な正義と、すべての国の平和や友好関係について言及しながら、国内で不当に扱われている黒人についての言及はない。それにもかかわらず、これらの公的言説が国を代表するものとして成り立っていたのは、当時のアメリカのディスコースが、黒人は労働力としては存在するが、権利主体としては存在しないことを当たり前としてきたからだ。そのようなディスコースでは、ジェファソン自身が奴隷所有者であることと、自由と公平の政治リーダーとして国民から深く尊敬されることに何の矛盾もなかったのだ。

それに対し、次に紹介するウォーカー（David Walker）の訴えは、黒人

のサブディスコースから奴隷制度の凄惨さを糾弾する。それは白人の間で共有されている主流派のディスコースの矛盾、具体的にはジェファーソンの奴隷制度擁護を辛辣に批判する。父は奴隷であったが母親が自由人であったため、教育の機会に恵まれたウォーカーは、以下のように記している²⁾。

ジェファーソン氏は世間に向かって、我々の天賦の身体も精神も、白人に劣ると公言したのではなかったか。実に驚くべきことだ。あのように深い学識の、生まれつきの身体にも恵まれた人物が、鎖につながれた人間集団をそのように評するとは。私はそれをいかに喩えたらよいのかわからない。たとえば野生の鹿を鉄の檻に入れ、そこに保管しておく。一方、同じように野生の鹿をそばに立たせ、自由に走らせ、檻の中の鹿が自由に放たれた鹿と同じ速さで走ることを期待するとでも喩えようか。(中略)

抑圧されているため十分に発揮する機会を与えられてはいないが、この国に才能があり学識のある黒人がいるのを知っている。抑圧されているからと言って、我々が獲得できるものまで、妨害させてはならない。-1829年「奴隷制度のもとの我々の悲惨な状態」

黒人の劣性は生来的なものではなく、「鎖につながれた人間集団」としてあらゆる機会を奪われ、抑圧されているからだと訴えるウォーカーの主張。それは逆に、黒人が生来的にかつ決定的に白人に劣っているということを前提とする当時の主流派のディスコースを顕在化させる。そのようなディスコースは、知的にも道徳的にも白人に劣る黒人は、むしろ奴隷制度のような環境下で管理することがふさわしいとする奴隷制度擁護の議論を可能にした。しかしウォーカーは、長い間囚われていた鹿と自由に走り回っていた鹿を競争させて、その優劣を語ることのナンセンスを喩えに、極度の抑圧状態に置かれている環境を無視して、黒人の劣性を「証明」する愚かさを指摘し、奴隷制度を正当化する白人社会の不合理をつく。

また白人に向かってのみ語られている従来のディスコースとは違い、ウォーカーの訴えは、黒人の聞き手に強く訴えかけるもので、後半の言葉は

教育の機会に恵まれることがほとんどなかった黒人の自己肯定感を鼓舞しようとする。しかしその言葉は逆に、黒人のサブディスコースでも、黒人には優秀な人はいないし、いろんな権利を妨害されても仕方ないという前提が共有されていたことを明らかにする。

3. 奴隷制度撤廃への時代

次にあげるのは奴隷解放宣言が出される8年前の1852年、7月4日の独立記念日を祝うイベントに招待されたフレドリック・ダグラス (Fredrick Douglass) の演説の一部である³⁾。ダグラスは奴隷の母と白人の父の間に生まれたが、当時の一滴の血のルールにより、8歳から16歳まで下僕として生活した。後に自由州に逃亡し、奴隷制度撤廃のために尽力した黒人の活動家である。

今日、皆様は幸福のうちに歓喜しますが、その幸福は共有されていません。皆様の父祖が残してくれた、正義・自由・繁栄・独立の豊かな遺産は、皆様の中で共有されていますが、私は入っていません。皆様に生命と癒しをもたらした日光は、私に鞭と死をもたらしています。この七月四日は皆様のものですが、私のものではありません。(中略)

「現状では、あなたや兄弟の奴隷制度廃止論者が、世間に好ましい印象を与えないのは当然だ。糾弾ではなく議論を展開し、非難ではなく説得するならば、主張が通る可能性は大きいだろう」という声が聞こえてくるような気がします。けれどもすべてが平明なことですから、議論を展開する必要はないと、私は失礼ながら考えています。奴隷制度反対の何を議論しろというのでしょうか。この国の人々にとって、この問題のどこがまだ明瞭ではないのでしょうか。奴隷は人間だと証明せねばならないのですか。— 1852年7月5日「奴隷にとって7月4日とは何か？」

「皆様の父祖が残してくれた、正義・自由・繁栄・独立の豊かな遺産は、皆様の中で共有されていますが、私は入っていません。」というダグラスの

言葉は、主流派のディスコースには収斂されえない黒人のサブディスコースを明らかにする。黒人のダグラスにスピーチを依頼し、自分たちと同じように独立記念日を祝うことを当然とする白人社会の鈍感ぶりは、主流派のディスコースから、黒人の視点が全く排除されていたことを顕在化させる。さらに後半、奴隷制度の廃止を「議論する」余地があるものにとらえる「善意の」白人を糾弾する言葉からは、奴隷制度支持者のみならず奴隷制度廃止を推し進める白人の間でも、黒人と白人を対等には考えないことを当然とするディスコースが明らかになる。

そのようなディスコースの前提は、後に奴隷制度の撤廃を宣言したエイブラハム・リンカーン (Abraham Lincoln) の演説にも見ることができる。イリノイ州上院議員選でリンカーンの対立候補であったスティーブン・ダグラスは、奴隷州の拡張に反対するリンカーンを、白人と黒人を「全く同等」に扱おうとしているとして白人の恐怖心を煽っていた。以下はリンカーンの反論である⁴⁾。

昨夜ダグラス判事は、社会的関係において黒人を白人とまったく平等にしようというのが私の意見であると前提して、強い恐怖を言明されました…黒人奴隷のこの問題に関する私の声明は誤り伝えられているかもしれませんが。しかし誤解される余地はないと考えます。私は独立宣言はすべての人はすべての点で平等につくられたとはいっていないという私の解釈を申し述べました。黒人は皮膚の色においてわれわれと同じ(equal)ではありません。しかし独立宣言は、すべての人はある点で平等であると宣言しているものと思います。黒人は「生活、自由、および幸福の追求」に対する権利において平等であります。確かに黒人は色においてわれわれと同じではありません—おそらくその他多くの点で同じではないでしょう。しかし黒人が己の手で獲たパンを口にする権利においては、白人黒人を問わず、ほかのすべての者と平等であります。(中略) 私の最も望んでいることは、白人と黒人との人種の分離であります。—1858年7月17日 スプリングフィールドにおける演説の一部

この演説を踏まえたうえで、5年後のゲティスバーグの戦いの勝利後、戦没者墓地献呈式でのリンカーンの有名な演説の一部を見てみる。

ここでわたしたちが、これらの死者の死を決して無駄にはしないこと、神の前で新たな自由の誕生を、そして人民の、人民による、人民のための政治を決して地上から消滅させないことを固く決意することなのです。－
1863年11月19日 ゲティスバーグ演説

二つの演説を合わせて読めば、「新たな自由の誕生」つまり奴隷制度の廃止が、白人と黒人の社会での平等や共生なのではないという前提が顕在化する。リンカーンの演説を成り立たせているのは、奴隷制度廃止と、人種間の平等の問題を切り離すことを当然とするディスコースなのだ。パーリン(2000)は消極的自由と積極的自由という見解を示した。前者は自由であるためには、どのような条件が満たされていなくてはならないかを問い、後者は自由がどのように行使されるべきかを問う。当時のアメリカのディスコースが奴隷制度廃止によって黒人に認めたのは、あくまで消極的自由であって、白人と同じように社会参加する積極的自由ではない。

ジェファーソンの演説の「すべての人」の背後には、黒人を排除するディスコースがあったように、リンカーンの演説の「人民の人民による人民のための政治」を成り立たせているのも、黒人と白人を同じ「人民」として扱うわけではないことを前提とするディスコースだ。だからこそ南北戦争後、憲法修正第十三条で奴隷制度が廃止され、第十四条で市民権の確立が保証されたのにも関わらず、それを実施するための法律が制定されるどころか、南部の州では、ジム・クロー法といわれる人種差別を認める法案が次々と可決されていった。このような法案の背後にあったのは、黒人には消極的自由しか認めないディスコースの枠組みだ。ディスコースは憲法の理念をもゆがめてしまう力を持つ。黒人が法的に白人と対等の立場に立てる公民権法の制定ま

で100年もの歳月を必要とした。

4. 公民権法制定への時代

憲法第14条で投票権が認められたのにもかかわらず、依然として黒人の公民権が保障されない中、黒人の活動家には、白人社会を真っ向から糾弾するのではなく、むしろ白人の反感をかかわないように、段階的に地位向上を進めていく戦略を選ぶ者もいた。黒人の法的平等を達成するには、政治を独占する白人の協力が必要であり、白人に恐怖心を抱かせないディスコースの枠内で説得する必要があったのだ。例えば黒人の法的平等を訴える演説で、ブッカー・T・ワシントンは以下のように述べている⁵⁾。

謙虚に、外国人には真似のできない献身をもって、あなたがたを守るために必要とあればいつでも命を捧げる覚悟で、我々はあなた方のそばに立つのであります。そして両人種の利益が一致するように、われわれの産業、商業、市民、宗教生活をあなたがたのものと組み合わせるのであります。純粋に社会生活の領域では、われわれは人間の指のように分離しておるのであります。相互の進歩の基盤となるあらゆるものは、手元のように一つであります。(中略)我々黒人の中で賢いものは、社会的平等を要求する動きが、まったくの愚かさ過ぎないと十分に理解しておるのであります。-1895年10月18日 アトランタ博覧会

ワシントンは、法的平等と社会的平等を使い分け、黒人である「われわれ」の法的平等が、人種統合である社会的平等まで意味するのではないという議論で「あなたがた」である白人を安心させようとする。ひとつひとつの指がそれぞれの役割を果たし、一本の手として機能するたとえば、人種間の協力と人種統合は別であることを当然とするディスコースを顕在化させる。しかしこのような議論は、人種分離政策を当然とするディスコースを強化し、後に「分離しても平等⁶⁾」という司法判断を導き出すことになったともいえる。

これに対して、「投票権が弾丸か」と訴えたマルコムX (1925-1965)⁷⁾

のように、徹底的に白人の搾取を糾弾し、必要があれば暴力も辞さないブラックナショナリズムを掲げる活動家もいた。もちろんそのような戦闘的な黒人の訴えは一喻えそれが正鵠をついていても—主流派のディスコースでは受け入れられることはなかった。穏健派の主張には耳を傾けることがあっても、強硬派の主張は受けつけない白人の態度は、黒人が謙虚に「お願い」するならまだしも、対等な立場から白人を糾弾することはあり得ないという主流派のディスコースが明らかになる。

公民権法制定にむけて白人層を動かしたのは、非暴力と人種統合を掲げた穏健派のキング牧師の言動だった。有名な「わたしには夢がある」のスピーチで、キングは黒人の過激な運動家について以下のように述べている⁸⁾。

最近、黒人社会を包囲している驚くほど戦闘的な姿勢をとる集団によって、我々がすべての白人に不信感を抱くようになってはいけません。今日ここに、白人も集まっていることでお分かりのように、白人同胞の多くは、われわれの未来と彼らの未来が、深く結びついていることを理解するようになっていきます。かれらの自由が、複雑にわれわれの自由と絡み合っていることを認識し始めています。われわれは、一人で歩むことはできないのです。—1963年8月28日 「私には夢がある」

キング牧師のナラティブは、公民権運動を白人との闘いではなく、社会正義の実現のための共闘と位置づけ、白人を敵視するのではなく同胞とよび、非暴力を徹底させることで多くの共感を得ることに成功する。しかしキング牧師の言葉の背後にあるのは、白人を怒らせないようにしなくてはメッセージが届かないディスコースの枠組みであり、「黒人が謙虚にかつ誠実に訴えれば、白人が黒人を理解し、その運動に協力する」というディスコースのひな型だ。そこには依然、白人と黒人の非対称な関係が織り込まれている。そしてこの非対称性が、今日に至るまで黒人が主流派のディスコースに一体化することを阻み、黒人のサブディスコースに活力を与えているのだ。

人種の非対称性を温存する主流派のディスコースで、波風を立てないよう

に黒人であることを強調せず「アメリカ人」として生きる道を選ぶのか。あるいは黒人であることをアイデンティティの中枢に置くサブディスコースに依拠して生きるのか。二つのディスコースのはざままで社会化する黒人のアイデンティティ。その葛藤をアフリカ系アメリカ人作家のゾラ・ニール・ハーストン（Zora Neale Hurston 1891-1960）は以下のように描写している⁹⁾。

自分が黒人になった日のことを覚えている。（中略）もうオレンジ郡のゾラではなくて、いまや小さな黒人娘になった。それを具体的に知った。心の中に感じ、鏡の中に発見した。色あせしない茶色の肌。こすり落とすこともできなければ、そこから逃げ出すこともできない。

それでも私は決して、悲しく痛ましい黒人ではない。大きな悲しみが私の魂の中に積り積もっているわけではなく、目の奥に潜んでいるわけでもない。まったく気にならない。自然の成り行きで、どういうわけか汚くみじめな役割を与えられ、いつも傷つけられていると感じる黒人の、お涙頂戴学校の生徒ではない。-1928年「黒い肌の私ってどんな感じ」

ボーヴォワール（1959）は「女は女に生まれるのではない。女になるのだ」ということばで「女」というものが、男との関係性で社会的に構築される概念であることを指摘した。同様にゾラの「黒人になった」という言葉から、アメリカの黒人もまた、白人との非対称な関係性の中で社会的に構築される人工的な概念であることを明らかにする¹⁰⁾。オレンジ郡の黒人のコミュニティで暮らしている間は、自分を黒人と意識する必要はない。しかしコミュニティを一歩出れば、そこは主流派のディスコースが支配する空間であり、黒人は白人との関係で非対称に意味づけられる。主流派ディスコースが植え付ける黒人のステレオタイプに圧倒されそうになりながらも、ポジティブなアイデンティティを構築しようとするゾラ。そこには、主流派のディスコースと黒人のサブディスコースのはざまで、「アメリカの黒人」としてのアイデンティティを構築しなくてはならない葛藤が顕在化する。

5. 黒人大統領誕生以降

公民権法の制定から50年が過ぎ、2009年1月には黒人初の大統領が誕生した。しかし経済的、社会的地位において人種間の格差が解消したわけではない。その背後にあるのは、今も生き続けるネガティブに黒人を規定するディスコースだ。以下のオバマ元大統領のナラティブ¹¹⁾からも、アメリカのディスコースにおいて「人種」が依然、単に肌の色ではないことがわかる

もちろん私も、ニューヨークでタクシーを捕まえるのに苦勞するくらい十分に黒人である。- Tavis Smiley Show, March 29, 2004.

黒人のコミュニティには、「彼はハイパーク育ちだから、ハーバードに行ったから、ハワイ生まれだから、十分に黒人ではない。」と考える人もいる。- Chicago Tribune, June 26, 2005.

ほんの3、4年前でも、レストランの駐車場で車を待っていると、(他の客から) 鍵を投げられるということがあった。- Charlie Rose Show, October 19, 2006.

オバマ元大統領のナラティブを成り立たせているのは、「黒人は犯罪の多い貧しい地域に住み、低学歴で、社会的地位も低い。」あるいは「偏見からタクシーもつかまりにくいし、高級レストランの駐車場では、客ではなくバレットパーキングの運転手と間違われる」ことを当たり前とするディスコースだ。黒人の大統領が誕生する時代になっても、社会にある黒人に対するステレオタイプはディスコースの中で生き続けている。どれだけ社会的成功を収めたとしても黒人には、肌の色だけでネガティブに判断される瞬間があるということが、21世紀になってもディスコースの了解事項なのだ。

「十分に黒人である」とか「十分に黒人でない」というナラティブは、逆にオバマを白人ではなく黒人として認識するディスコースを顕在化させる。母親が白人で父親がケニアからの留学生であったオバマに対して「十分に黒人ではない」という批判はあるが、「十分に白人ではない」という批判はない。アメリカのディスコースではまだ、一滴の血のルールが生きていて、そこで

はオバマはあくまで「黒人」として認識されるのだ。

また「十分に黒人ではない」という黒人からの批判は、主流派のディスコースと黒人のサブディスコースでは、黒人としての振る舞いや経験に違うことが期待されていることを顕在化させる¹²⁾。黒人のサブディスコースでは、白人のネガとして自らのアイデンティティを構築することが「望ましい」が、主流派のディスコースでは、人種を前面に押し出し、権利や社会的不平等を声高に主張するのではなく、同じ社会の一員として穏健に議論することが「望ましい」とする枠組みがある。

そのような二つのディスコースの間で、政治家として「白人からも受け入れられる黒人」として発言しなくてはならないオバマには、黒人からは「十分に黒人ではない」という批判がつきまとった。しかし黒人であることを強調しすぎれば、白人から自分たちの代弁者として好ましいとは見られない。オバマのかかえるアイデンティティの葛藤は黒人だけのものではない。

宗教、ジェンダー、セクシュアリティ、障害、移民のステイタスなどを理由に、主流派のディスコースから周辺化されたところで社会化していくマイノリティは、十全な市民としてのアイデンティティ構築が難しい。確かに近年はマイノリティの多様な経験が主流派のディスコースで共有される機会も増え、理解も広まってきたのも事実である。しかしその一方で、ヘイトスピーチのようなバックラッシュが、容易に差別の文脈を活性化し、彼ら／彼女らのアイデンティティを脅かしている。

例えばトランプ元大統領が、自らの移民政策を厳しく批判する4人の民主党マイノリティ女性議員に向けて発したナラティブ¹³⁾を見てみる。

「『革新派』の民主党女性議員たちは、政府が本当に完全にひどい状態で、世界のどこよりも最悪で最も腐敗した政府（もし機能している政府があるとしてだが）の国からもともとやって来たのに、世界で最も偉大で最強のアメリカ合衆国の人々に政府の運営について、大声で罵倒しているのは実に興味深いことだ。もと居た場所（国）に帰って完全に崩壊した、犯罪まみれの自分の出身地を修復する手助けをしたらどうか。それをやり遂

げてから戻ってきてその手法を教えてください。」 - 2019年7月14日
Twitter@realDonaldTrump

このトランプ大統領のナラティブを「人種差別発言」として非難する決議案が2019年民主党多数の下院で採決された。トランプ大統領は、自分は「人種」については何も述べていない。これを人種差別と非難する人間こそが人種主義者であると反論したが、この発言のどこが人種差別的なのかをディスコースの枠組みから考えてみる。

トランプ大統領の発言を成り立たせているのは、アメリカ社会には「自分の国に帰れ」という罵りの対象になるアメリカ人と、そのような罵りの対象にはならない「十全な」アメリカ人がいることを前提とするディスコースだ。トランプ大統領の示唆する十全なアメリカ人が、もともとの原住民であるネイティブアメリカンではなく、白人を指すことがディスコースで了解されている。だからこそ、この発言が白人至上主義者の賞賛を得る一方で、民主党から人種差別的であるとして糾弾されたのだ。非白人の移民や難民は、アメリカで暮らせることに感謝こそすれ、不平不満をいうのは生意気であると糾弾するトランプ大統領の発言は、ディスコースの根底にある、非白人を二流市民として扱う差別の歴史を顕在化させる。

ターゲットとなった議員はそれぞれ、ソマリア、パレスチナ、アフリカ、プエルトリコ系で、そのうち3人はアメリカで生まれ、4人全員が市民権を持っている。それでも彼女らは「国に帰れ」といわれるのだ。民主党がトランプ大統領の発言を糾弾したのは、そのような発言が、差別と排除のディスコースを活性化し、今なお心理的な抑圧から解放されることが難しいマイノリティの存在自体を脅かすものになるからだ。

6. 結び

この論文では、奴隷解放から150年、公民権法制定から70年以上過ぎた今日でもなぜアメリカ社会で「人種」が問題であり続けるのかを、時代ごとのナラティブの背後にあるディスコースの前提—バイアス—を顕在化させるこ

とで考察した。法律のレベルでは人種差別が改善しているようで、今なお人種が問題であり続けるのはなぜか。それは主流派のディスコースが、今も人種間の格差をある程度「自然なこと」として受け入れ、構造的差別を支えているからだ。

しかしその一方で、ディスコースは常に変化へと開かれているのも事実である。近年のBLMやLGBTQの社会運動は従来のディスコースの前提に大きな変化をもたらし、私たちの「当たり前」や「自然なこと」を書き換えたといえる。ディスコースのダイナミズムは、あらゆる人のなにげない日々の社会行為の蓄積であり、その責任は私たち一人一人にゆだねられているといえるだろう。

参考文献

- アレックス・ヘイリイ 『マルコム自伝』 浜本武雄訳、河出書房新社、1993年。
荒このみ編訳 『アメリカの黒人演説集 キング・マルコムX・モリスン他』 岩波書店、2008年。
上坂昇 『アメリカの黒人保守思想 反オバマの黒人共和党勢力』 明石書店、2014年。
高木八尺 斎藤光 『リンカーン演説集』 岩波書店、1957年。
デビッド・セイン 佐藤淳子 『アメリカ大統領英語名言集』 Jリサーチ出版、2010年。
トニ・モリスン 『「他者」の起源』 荒このみ訳、集英社新書、2019年。
西川秀和 『歴史が創られた瞬間のアメリカ大統領の英語』 ベレ出版、2008年。
朴育美 「Obamaのナラティブが顕在化させる「アメリカ社会のディスコース」と「人種のフレーム」」 『時事英語学研究』 第49号1-16、日本時事英語学会、2010年。
バーリン・アイ 『自由論』 小川晃一・福田徹一他訳、みすず書房、2000年。
ポーヴォワール・ド・シモーヌ 『第二の性』 生島遼一訳、新潮文庫、1959年。

Anderson, Benedict. *Imagined Communities: Reflection on the Origin and Spread of Nationalism*. London: Verso, 1991.

Barack Obama In His Own Words. Edited by Rogak, L. New York: Carroll & Graf Publishers, 2007.

Fairclough, Norman. *Critical Discourse Analysis*. London and New York: Longman,

1995.

Fairclough, Norman. *Language and Power 2nd edition*. London and New York: Longman, 2001.

Garfinkel, Harold. *Studies in Ethnomethodology*. Cambridge: Polity Press, 1967.

Holmes, Janet. *An Introduction to Sociolinguistics 3rd edition*. Essex: Pearson Educational Limited, 2008.

Schiffrin, D. *Approaches to Discourse*. Cambridge: Basil Blackwell, 1994.

注

- ¹ 日本語訳は『アメリカ大統領名言集』（2010）及び『歴史が創られた瞬間のアメリカ大統領の英語』（2008）を使用。
- ² 詳しくは『アメリカの黒人演説集 キング・マルコムX・モリスン他』（2008）p.7～p.27を参照。
- ³ 詳しくは『アメリカの黒人演説集 キング・マルコムX・モリスン他』（2008）p51～p.98を参照。
- ⁴ 詳しくは『リンカーン演説集』高木・斎藤訳p.66～p.71
- ⁵ 詳しくは『アメリカの黒人演説集 キング・マルコムX・モリスン他』（2008）p203～p.210を参照。
- ⁶ 1896年プレッシー対ファーガソンの裁判で確認された人種隔離を違憲としない法原理。
- ⁷ 黒人の運動家。ネイション・オブ・イスラムのスポークスマンとして活躍し、黒人至上主義と黒人と白人の分離を訴えた。詳しくは『マルコムX自伝』（1993）を参照。
- ⁸ 詳しくは『アメリカの黒人演説集 キング・マルコムX・モリスン他』（2008）p277～p.284を参照。
- ⁹ 詳しくは『アメリカの黒人演説集 キング・マルコムX・モリスン他』（2008）p261～p.268を参照。
- ¹⁰ 黒人のアイデンティティが白人との非対称性な中で生み出されるということについてはトニ・モリスン（2019）も『「他者」の起源』で詳しく論じている。
- ¹¹ *Barrack Obama in His Own Words*、2007年を参照。日本語訳は著者。
- ¹² 黒人のアイデンティティが白人との非対称性な中で生み出されるということについてはトニ・モリスン（2019）も『「他者」の起源』で詳しく論じている。
- ¹³ 日本語訳は著者。

